第３１回

開成町福祉作文コンクール

入選作文集

ふれあいネットワーク

社会福祉法人 開成町社会福祉協議会

もくじ

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆
おじいさんのなみだで気づいたこと　開　成６年　大野朱々風（おおのすずかぜ）　…1
◆共同募金会開成町支会長賞◆
「続けていること」　開成南６年　谷口　侑生（たにぐちゆう）　…1
◆開成町教育長賞◆
意識を変えよう　開成南５年　府川　拓夢（ふかわたくむ）　…2

優良賞

いろいろな福祉　開成南４年　畠山　敦暉（はたけやまあつき）　…2
「ともに生きる」ことについて考えた　開　成５年　遠藤　陽世（えんどうはるよ）　…3

佳作

私に出来る事　開　成５年　小沼　宥輝（こぬまゆうき）　…3
福祉はどこにあるのだろう？　開成南４年　清田　拓海（きよたたくみ）　…4
参加する福祉と届ける福祉　開　成４年　今西　美好（いまにしみこの）　…4
つなげたい、元気パワー　開　成５年　井戸　心花（いどここな）　…4
視覚障がい者が今求めていること　開　成５年　北山　陽菜（きたやまひな）　…5

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆
友だちが教えてくれたこと　文　命３年　草柳　紗希（くさやなぎさき）　…6
◆共同募金会開成町支会長賞◆
妹から学んだこと　文　命３年　髙橋　美妃（たかはしみき）　…6
◆開成町教育長賞◆
相手を思うこと　文　命３年　髙橋　彩（たかはしあや）　…7

優良賞

幸せな社会の実現に向けて　文　命３年　中津川みき（なかつがわ）　…8
よりそう心を　文　命３年　谷口　直輝（たにぐちなおき）　…9

佳作

今の私に出来ることは　文　命３年　佐藤　円香（さとうまどか）　…10
頼れる存在　文　命３年　川本　菜摘（かわもとなつみ）　…11
幸福のある社会をつくっていくには　文　命３年　戸倉　凌馬（とくらりょうま）　…11
福祉について考えたこと　文　命３年　田代　美玲（たしろみれい）　…12
いろんな思い　文　命３年　小野崎紗矢（おのざきさや）　…13

■作文の中、「障害」という言葉を「人や人の状態」を表す場合は、「障がい」と表記しています。

《資料》実施要項　審査員名簿

小学生の部

優秀賞（3編）

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

おじいさんのなみだで気づいたこと

開成小学校6年　大野朱々風（おおのすずかぜ）

デイサービスでの訪問演そう中でのことです。顔をぐちゃぐちゃにして泣いているおじいさんが見えました。私は、おじいさんのなみだの理由がわからなくて、家に帰っても夜になっても次の朝も、ずっと考えていました。

今までの私は、「演そうをしに行ってあげている」という気持ちが大きかったと思います。でも、今はちがいます。私は、「演そうをしに行かせていただいている」という気持ちに変わりました。それは、おじいさんをずっと気にかけ寄りそい、言葉をかけながら何度もティッシュをわたす職員さんの優しさや、もっと盛り上げようと手をたたいたり、一番大きな声で歌う職員さんの一生懸命な姿。そして、私たちの演そうで歌ったり笑ったり、いつも笑顔でむかえてくれるおじいさんやおばあさんたち。その温かいふん囲気の中に招待していただいている私たちは、とても幸せなのだと気付きました。そう教えてくれたのは、名前も知らないけれど、あの日、車いすに座って泣いていたおじいさんのなみだです。言葉がなくても、気持ちを伝え合わなくても、私の演そうとおじいさんのなみだは、確かに心で話しをしました。

私は、兄と姉と、訪問演そうを続けて三年になります。人の役に立ちたいとか、人の役に立っているかとか、そんな難しいことを考えるのではなくて、今、自分にできることで、誰かが少しでも喜んでくれたり笑ってくれたら、とてもうれしいことだと、私は思います。

幸せという意味の「福祉」という言葉には、それぞれに幸せという意味を持つ二つの漢字が、仲よくくっついています。それなら、自分の幸せと誰かの幸せ。そう考えたら、自分にも何かできることがあると思いませんか。十二才の私にもできることがあるのだから、みんなにもできることが、必ずあるはずです。

◆共同募金会開成町支会長賞◆

「続けていること」

開成南小学校6年　谷口侑生（たにぐちゆう）

ぼくは、小学二年生の時から続けている事がある。それは盲導犬の募金をする事だ。なぜ始めたかと言うと、二年生の夏に盲導犬について学べる富士ハーネスという施設に家族で見学に行った時、盲導犬を育てるには時間もお金もかかる事や、まだまだ数が足りない事を知ったからだ。

そしてこの間、盲導犬と歩行体験ができる機会があったので参加した。ぼくは一度盲導犬と一緒に歩いてみたかったので、とても楽しみだった。でも、実際にアイマスクをつけてハーネスをにぎってみると、方向感覚がなくなって少しこわくなった。それでも、

「ゴー。ストレート。」

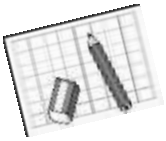
とぼくが言うと、指示に従って盲導犬が前に歩き始めた。盲導犬は想像した以上に力強くグイグイとぼくを引っ張って歩いてくれて、最初は驚いたけれど、だんだん頼もしいなあという気持ちになった。視覚障がいのある方はこうして本当に街の中を歩いているのだから、お互いがしっかり信頼し合っているんだろうなと感じた。でも、視覚障がいのある方から、盲導犬はカーナビじゃない。道も信号も人が指示を出している。だから盲導犬を連れていても、困っていそうだったら声をかけてほしいという話を聞いて驚いた。確かに今までぼくは盲導犬を連れていれば大丈夫だろうと勝手に思い込んでいた気がする。これからは、どんな時もまず相手をよく見る事が大切だと思った。

ぼくがしている募金は本当に少しだけど、小さな事でも続けていったり、関心を持ち続ける事は、きっと大きな力になると思う。もっとみんなが暮らしやすい街になるように、自分のできる事をこれからも続けていきたいと思う。

◆開成町教育長賞◆

意識を変えよう

開成南小学校5年　府川（ふかわ）　拓夢（たくむ）



四年前、母がケガをした。左ひざをいため、しばらく松葉づえを使って生活することになった。松葉づえでの生活は見ていてとても不便そうだった。母に聞いてみると「段差」と「駐車場」がつらかったそうだ。段差は特におりる時が下に落ちそうでこわかったらしい。駐車場は、いつも駐車している所が車イスせん用の駐車場ではなかったから、車と車の間がせまくて、ドアが他の車にあたりそうになったらしい。反対に、家の中では生活しやすかったそうだ。家のゆかに段差がなく、トイレが洋式ですわりやすかったからだそうだ。母の話を聞いて「バリアフリー」という言葉と、ぼくが通っている開成南小学校を思い出した。

開成南小学校には、いろいろな所にスロープや手すりがある。調べてみて、「神奈川県バリアフリーまちづくり賞（ハード部門）」という賞を受賞したことがあると知った。体が不自由な人やケガをしている人でもすごしやすいように細かい部分まで考えて作られているようだ。設備の整った学校に通っているんだなと、うれしく思った。しかし、自分は毎日の生活でその設備の大切さを感じていなかったことにも気づいた。

ぼくが赤ちゃんの時に行った旅行で、父がベビーカーをおしていた。その時、スロープの上にそうじ用具が置かれていて通れなかったことがあったそうだ。どれだけ設備が整っていても、そこで生活している人が使い方を意識しないと設備が整っている意味がないと思った。

点字ブロックやスロープに物を置かないこと。エレベーターではなく階段を使うこと。整えられた設備を、本当に必要とする人が使えるようにするために、自分にできることを一つひとつやっていきたい。

優良賞（2編）

いろいろな福祉

開成南小学校4年　畠山（はたけやま）　敦暉（あつき）

夏休みに入る前、福祉作文が宿題になっているのを知った時、ぼくは「福祉」って何だろうとギモンに思いました。お母さんに聞いてみると、「人間が幸せにくらすために協力し合うことだよ。」と教えてくれました。

この前ぼくは、東京の山の手線に乗りました。ある駅で、車いすに乗ったおばさんが電車から降りようとしました。すると、ドアが開いたしゅん間に駅員さんが、電車とホームのだん差をなくすためのボードを設置しました。ぼくはそれを見て、障がいのある人のためにいろいろな工夫をしているんだなと思いました。お母さんは、「これも福祉だよ。」と教えてくれました。

テレビのニュースを見ていると、毎日西日本豪雨のひ害でたくさんの人が命を落としたり、家がしん水やとうかいしたことなどが放送されています。そしてひ災地には、全国から「困っている人を助けてあげよう！」とたくさんのボランティアが、がれきを片付けたり、ひなん所のお手伝いをしたりしています。ぼくは、これも福祉なんだなと思いました。

全国には、体が不自由な障がい者やお年よりがたくさんいます。その人たちのために、ぼくたちには何が出来るのか、何をしなければならないのか出来る事を改めて考えてみようと思いました。

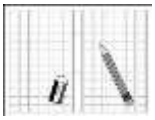
明日から実行しようと思うのは、電車やバスで席をゆずってあげることやマンションのお年よりが重い物を持っていたら、ぼくがかわりに持ってあげようということです。

ぼくは、この夏休みをきっかけに、少しだけ福祉というのはどういうものなのか分かった気がします。

ぼくたちが幸せにくらすためには、みんなが協力し合うことが大切だし、いろいろな福祉があるんだなと思いました。

「ともに生きる」ことについて考えた

開成小学校5年　遠藤（えんどう）　陽世（はるよ）



「ともに生きるかながわ憲章」という文を読みました。「ともに生きる」とは、どういうことだろう。「ともに生きる」には、どうしたらいいのだろう。

わたしは、まず、「ともに生きる」とは、どういうことなのか、考えてみました。「ともに生きる」とは、単純に、みんなが幸せに暮らすことで、しょうがいがあっても、年をとっていても、不自由なく暮らせることだと思います。人とちがうから、といって、がまんすることがあるとしたら、ちっとも幸せでは無いからです。

では、「ともに生きる」には、どうしたらよいのでしょう。考えてみました。「ともに生きる」と言われると、とても大きなことのように思えます。でも、この間、あ、こうすればいいのかな、と思えることがありました。耳の遠い人と話した時、わたしが、ほかの人と話すスピードと声の大きさでしゃべると、二回、同じことをくり返しても、伝わりませんでした。わたしは、なんで分かってくれないんだろう、とイライラしました。きっと、その人も、何を伝えたいんだろう、分からない、と思って、イライラしたり、困ったりしたと思います。でも、わたしがちょっと声を大きくし、はっきりしゃべるだけで、気持ち良くお話できたのです。

わたしは、こんなに少しのことだけで、こんなに変わるんだな、と思いました。

だから、わたしはこういう小さなこと、小さな気持ちが大事だと思います。「ともに生きる」と言われると、とても遠いものに感じますが、実は自分達にもできることなのです。

だからわたしも、しょうがいのある人やお年よりの人と接する時は、「ともに生きる」ことができるように、どんな小さいことでもいいから、やってみようと思います。

佳　作（5編）

私に出来る事

開成小学校5年　小沼（こぬま）　宥輝（ゆうき）

今年の初め、九十七才になる私のひいおばあちゃんが入院しました。足が不自由になっていましたが、それまで入院を一度もした事がないくらい元気だったひいおばあちゃんが、お見まいに行くと車いすに乗っていました。

私はそんな姿を見て悲しい気持ちになりましたが、私に出来る事を何かしたいと思いました。

ベッドに横になっているよりは、と思って、車いすに乗ってもらい病院の中を一緒に散歩しました。その時、天気の事、まどから見える景色の事、病院の事、昔行った旅の事などたくさん話をしました。それから、体中がかゆいと言っていたので、薬をぬってあげたり手のとどかない所をさすってあげたりしました。食事と水分のせい限があって、のどがかわいても自由に飲む事ができなかったので、小さな氷を口に入れたりもしました。

ひいおばあちゃんは「病院はする事がなくてたいくつだ。」と言っていたけれど、話をしているうちに笑顔になっていきました。そして、私の出来るお手伝いは小さな事だけど、喜んでくれました。私はうれしくなりました。

私は後かいしている事があります。それは、去年なくなったねたきりだったもう一人のひいおばあちゃんに、近くにいるだけで何も出来なかった事です。体が不自由だったり、病気の人が目の前にいるのに、何もしない、何も出来ないのはすごく後かいします。だから、ひいおばあちゃんにはできるだけ会いに行きたいです。

お年よりや、体の不自由な人が私達に何をしてほしいと思っているのか、相手の立場になって考える事が大切だと思います。そして、お手伝いをして、たくさんの人に笑顔になってもらいたいです。

福祉はどこにあるのだろう?

開成南小学校４年　清田（きよた）　拓海（たくみ）

ぼくは、今まで、福祉というものは、目が見えない人や耳が聞こえない人や車イスに乗っている人が利用して、自分には関係ないものだと考えていました。けれども、この夏休みに、ふくし一日教室に参加したり、福祉について調べたりして、自分の近くにあると分かりました。例えば、保育園や学童も福祉の一つだと初めて知りました。また、ぼくも困った時に、地いきの人に助けてもらっていて、それも福祉かもしれないと思い始めました。

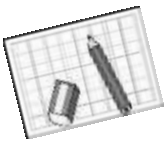
三年生の三学期が始まってすぐ、ぼくは、かぎを持たずに学校へ行き、帰って来たら家に入れませんでした。家の中には、お母さんが作ったおべん当があったけれど食べられなくて困りました。それで、まずお向かいの家に相談しました。おばさんは、お母さんの連らく先は分からないけど、お昼を食べていってもいいと言ってくれました。でもお母さんに、連らくした方がいいと思って、少し遠いけど美よう院をやっている友達の家に行きました。そこで、お母さんと連らくがつき、お昼をごちそうしてもらい、ほっとしました。

ぎゃくに、ぼくが手助けしたこともあります。暑い日に、一年下の男の子が家の前にずっといたので声をかけたら、お母さんが来なくて困っていました。ぼくのおばあちゃんから学校に連らくすると、その子のお母さんも困っていたようで、すぐにむかえに来てくれました。あとでお礼を言われ、アイスをもらいました。ぼくは、役に立てたことと、ついでにアイスがもらえてうれしかったです。

このように、ぼくは、近所の人や友達に助けられたり、自分が助けたりしながら生活していることに気づきました。そういうのを地いき福祉というそうです。町全体が困っている人の話を聞いて、やさしくできたら、だれもが安心してくらせるのだと思います。

参加する福祉と届ける福祉

開成小学校４年　今西（いまにし）　美好（みこの）



全て国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。と、ドラマでおぼえた言葉を言ったら、お母さんがビックリしてふりかえった。これは日本国憲法で福祉のきほんになっているものだと話してくれた。そこで私は、おじいちゃんの事を考えた。高齢者の福祉の先生みたいな人だと思ったからだ。

私のおじいちゃんは六十七歳だ。同じ開成町にすんでいて私より日焼けしている。私が遊びに行くときは電話をして、家にいるか確認する。ゲートボール、パークゴルフ、自治会、絵を描きに出かけていてほとんど家にいないからだ。まさに健康で文化的な最低限度以上の生活をしている。私は、さっそく、予定を聞くために電話をしてインタビューしに行った。

健康のひけつは、みんなで集まって話しながら体を動かして声を出す事、仲間には九十歳の方もいて、そうやって楽しみがある事で元気に続けられるそうだ。自治会にも、全部参加し、知らなかった事を知れたり新しい住民の方と知りあえたりして、コミュニケーションをとる事で人の幅ができて、道で会うと、あいさつしあって、うれしい気持ちになるそうだ。いがいだと思うかもしれないけど年をとると忙しくしている事がうれしいと教えてくれた。人とのふれあいと、楽しみがある事が大切なんだなと思った。おじいちゃんの話で心配になった事がある。私のひいおばあちゃんのことだ。ひいおばあちゃんは八十二歳で、一人で動けず、ずっと家にいる。楽しみは、私と会う事。動けない高齢者には、会いに行かなきゃいけない。楽しみやふれあいを、届けなきゃいけない。明日は、ひいおばあちゃんの部屋のまどから、鳥のえさをまいて、二人で鳥を見たい。

つなげたい、元気パワー

開成小学校５年　井戸（いど）　心花（ここな）

わたしは、毎年あわおどりで、老人ホームにいもんに行っています。いもんは、おたんじょう会のお楽しみです。

はじめに、がんばって練習してきたあわおどりのパフォーマンスをおどります。衣しょうも着物やはっぴを着ます。衣しょうを着た方が「きれいだね。」と喜んでくれるからです。おばあちゃん達は、リズムにあわせて、手びょうしをしていました。たいこやふえの音に体をゆらしたり、リズムにのっている人もいます。

次に、おどりたい人がおどれるように、そうおどりをします。

最後に、車いすの人も参加できるように、「好きになった人」をやります。「好きになった人」は、車いすの人達が円になり、その円の中をわたし達が順番にまわっていきます。おばあちゃんの手をとりながらむかい合います。手の不自由な人もいるので、その人に合わせて手をとるようにします。

おじいちゃんおばあちゃんは、わたしの手を、ぎゅっとにぎり、

「やわらかいね。あったかいね。」

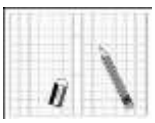
と言って笑いました。なかには、手をにぎって泣いてしまう人もいました。

代表してお礼を言っていたおばあちゃんが、わたし達のおどっているすがたを見たり、いっしょにおどったりして、みんなから元気なパワーをもらえたと言ってもらえてうれしかったです。

いもんの時だけではなく、町でもおじいちゃんおばあちゃんに、会った時には、元気にあいさつをしたり、ふれ合う機会を自分からつくって、みんなに元気なパワーを分けて、元気なおじいちゃんおばあちゃんになってほしいです。

視覚障がい者が今求めていること

開成小学校５年　北山（きたやま）　陽菜（ひな）



視覚障がい者は全国で約三十万人いるそうです。しかし、その中で点字がしっかり読める人は、一割しかいません。とてもおどろきました。ほとんどの人は「視覚障がい者」イコール「点字が読める」と思いがちです。

点字があまり広がらなかった理由は、大きく分けて三つあります。一つ目は、点字を覚えるのが大変だということです。濁点、半濁点を入れなくても、ひらがなは四十六文字もあるからです。二つ目は、中途視覚障がい者（人生の途中で視覚障がいになった人）だということです。もちろん、全ての中途視覚障がい者の人が点字を覚えられないわけではありませんが、今まで目から情報を取り入れてきた人が別の方法を覚えるのはとても難しいからです。三つ目は、全盲の人以外は点字を習う機会がほとんどないことです。

さまざまな理由で、点字を読める人が少ないにも関わらず、今の日本は点字表記を増やしています。今の日本が使っている点字は、約百三十年前に「石川倉次」さんという人が「ルイ＝ブライユ」さんの六点点字を日本人向けに改良したものです。私たち健常者が使いづらいというと、すぐに便利に改良されていくのに、視覚障がい者は、約百三十年前の覚えづらい点字を習っています。いくら健常者の人が点字表記を増やしても点字をしっかり読める人が少なければほとんど活用されません。

点字は右から打ってうらがえして左から読むということを、健常者の人は何人が知っているでしょうか。私が一番大切だと思うのは点字を視覚障がい者だけのものにしないこと。視覚障がい者が今本当に求めていることは、健常者と視覚障がい者、どちらにも打ちやすく読みやすい点字を作ることだと思います。私は、これからそう変わる未来を願っています。

中学生の部

優秀賞（3編）

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

友だちが教えてくれたこと

文命中学校3年　草柳（くさなぎ）　紗希

私は今、髪の毛を伸ばしています。ヘアドネーションという活動に参加するためです。以前友だちをがんで亡くしてしまったのがきっかけで、どのような形でもいいから何か支えることはできなかったのかと考え、ヘアドネーションに参加したいと思いました。

亡くなってしまった友だちは明るくいつも元気で、クラスのムードメーカーのような存在でした。風邪をひくことも少なかったのでがんになり、亡くなってしまったときいた時は言葉では表現できないほど心が悲しみであふれていました。亡くなってから約一か月の間は悲しみのあまり何も考えることができませんでした。しかし、時間が過ぎていくと同時に心も落ちついてきて、その友だちから教えてもらったこと、考えさせられたことがたくさんあることに気づきました。身近な人が、同級生が亡くなったというのはとても悲しいのですが、命を大切にしよう、今という時間を大切にしようと強く思います。また、がんというものを身近に感じ、自分ががん患者を支えることはできないのか、少しでも力になりたいと思いました。そこで見つけたのがヘアドネーションというものでした。

ここまで、ヘアドネーションという言葉を使ってきましたが、どのようなものか知っていますか。一度はきいたことがあるという人が多いのではないでしょうか。ヘアドネーションとは小児がんや先天性の脱毛症、不慮の事故などで頭髪を失った子どものために、寄付された髪の毛をその子に合わせて採寸し、型どりを行って製作する、完全オーダーメイドの人毛の医療用ウィッグを無償提供する活動です。条件は三十一センチメートル以上であること、過去のダメージがないことだけで誰でも参加しやすい活動です。団体によっては十五センチメートルから受け付けているのですが、三十一センチメートル以上でないと頭全体を覆う全頭用のフルウィッグというものを作ることはできません。年齢、性別、国籍、髪質問わず、誰でもできるというのはヘアドネーションの一つの魅力なのではないでしょうか。

私はがん患者のためにできることを考えた時、一番に思い浮かべたのは献血に参加することと骨髄バンクに登録し骨髄移植のドナーとなることでした。この二つは治療を直接的に支えることはできますが、自分の身体に負担がかかってしまったり、厳しい条件があり中学生の私にはできません。また、私はあまり身体が強くないので大人になっても参加することは難しいと思います。だから、ヘアドネーションというものを知り、自分の健康状態や年齢に関係なく、中学生の私にもできることがあると分かった時はとても嬉しかったです。ウィッグがあることで外へ出掛けることが楽しみになれば気持ちがだんだん明るくなり、心を元気にすることができます。心が元気になれば患者さんの身体の回復にもつながっていくと私は信じています。ヘアドネーションは治療とは少し違った角度から支えられる、素晴らしいものだと思います。だからヘアドネーションがもっと世間に広まってほしいです。

一人の友だちによって献血や骨髄移植のドナーのように中学生にはできないこともあるけれど、ヘアドネーションのように中学生の私にもできることがあることを知りました。大人にはできなくても、中学生だからこそできることもあると私は思っています。私はこれから、今の私にできることを精一杯やっていきたいです。

◆共同募金会開成町支会長賞◆

妹から学んだこと

文命中学校3年　髙橋（たかはし）　美妃（みき）

私は、三人兄妹の真ん中です。上に兄、下に妹がいます。兄とは七つ離れていて、妹とは年子です。年子の妹は生まれつき知的障がいを持っています。生まれつき小脳が小さく、言語と運動機

能があまり発達していません。普段は小田原にある養護学校に通っています。そこで妹は他の障がいを持っている子達と仲良く元気に過ごしています。

みなさんは障がい者だから何も出来ない。変だ。と決めつけていませんか。それは違うと思います。私は妹から学んだことがあります。障がい者から学べることなどあるわけない。と思いますよね。でもそれはただのみなさんの思い込みであり、障がい者から学べることはあるのです。

私が妹から学んだことは、「出来ないことでも諦めないでやり続けること」「何事にも一生懸命に取り組むこと」「あたり前のことがあたり前ではないこと」を妹から学ぶことができました。こんなこと当然のこと。そんなのはわかっています。しかし妹と過ごしていく中であたり前のことをもっと深く知ることができたのです。

一つ目の「出来ないことは諦めないでやり続けること」は、妹は字を書くこと、話すこと、私があたり前にできていることなど色々なことが上手に出来ません。しかし、私の真似をしたがるのでいろいろな事に挑戦します。でも結果はダメなことばかりです。でも妹は負けず嫌いなのか、出来るまでずっとやり続けます。そして出来た時には最高の笑顔で、「出来た。」と言ってきます。どんなに時間がかかっても、妹には不可能だと思っていたことを妹は可能にします。私は時間がどんだけかかっても出来るまでやり続ける妹を見て、出来なくても諦めないでやり続けることが大切なのではないかと思いました。

二つ目の「何事にも一生懸命に取り組むこと」は、妹を見てて一番思うことです。妹は皆さんや私に比べて出来ることが少ないです。しかし、妹は出来ないことでも出来ることでもいつでもどんな時でも一生懸命に取り組んでいます。そして、結果が出来ていても出来ていなくても、私たち家族は妹が一生懸命取り組んでいる姿を知っているのですごく褒めてあげます。そうすると、妹は嬉しそうに笑います。その笑顔を見ると私は、結果がだめでも一生懸命取り組んでいれば、それを見ていてくれた人は分かってくれるのではないかと思います。私はその事を妹から学び、部活で負けていても一生懸命最後まで戦おうという気持ちを持つことができました。

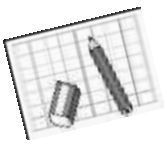
妹から学ぶことは、プロの選手から学ぶことに対したら、小さくすごく簡単なことです。しかし、生きていく中で、とても大切で必要なものだと思います。そして、これから妹と過ごしていく中で、もっと学べることはあると思います。妹から学ぶことは決して無駄ではないと思います。

今、私達があたり前に出来ていることは、妹や障がい者の方のあたり前ではありません。私たちは出来ることがあたり前と思っています。しかし、そのあたり前に出来ている事が、いつか、あたり前じゃなくなってしまうかもしれません。いつなにが起こるかわからない世界で、私達は助け合って生きていく事が必要だと思いました。なので、これからは困った人など障がい者のサポートをする仕事につきたいと思いました。

◆開成町教育長賞◆

相手を思うこと

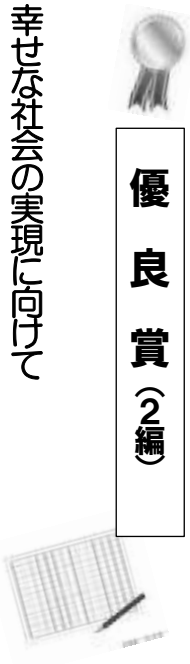
文命中学校3年　高橋（たかはし）　彩（あや）



ある日、私は弟と二人で出かけたときにバスに乗りました。しかし、その日は休日。さらに最寄りの駅の上りの電車で何らかの問題が発生し、運行がストップしてしまい、代わりとなる交通機関を求める人々が次から次へとバスに乗車してきました。バスの中は満員で、かんたんに身動きができる状態ではありませんでした。私と弟は体力に余裕があったので立っていましたが、辺りを見回すと小さい子どもからお年寄りの方までもが座席に座れずに立っていました。一方で座席に座っている人の中には、若い人や元気そうな人もいました。これは私の目だけでの判断だったので実際は、少し足が痛かったり…だとか、少し疲れていたり…だとか何かしらの理由があったのかもしれません。でも私は、その立場だったらきっと譲ることにためらいをもってしまってただろうと思います。バスに乗ってから少し時間が経過した頃、私の近くで立っていた小さな女の子がお母さんに向かって、「座りたい。」とごね始めました。お母さんがなだめていたら、そばに座っていたおじ

いさんが立ち上がり、
「よかったら座ってください。」
と言って立ち上がりました。女の子のお母さんは戸惑いながらことわると、
「普段から運動してるので大丈夫ですよ。」
とおじいさんは満面の笑みで言葉を返し、席を譲っていました。席を譲ることは珍しい光景ではないのですが、このとき私の心に何か残るものがありました。それと同時に頭の中によぎる言葉がありました。それは、『余裕のない時にこそ、人に優しく』です。誰が発言した言葉かは分かりませんが、私が目のあたりにした光景にまさしく合う言葉でした。おじいさんもきっと願わくは、ずっと座っていたかったと思います。しかし、自分より相手のことを思う気持ちから、このような行動ができたのだと思います。気持ちに余裕がないとき、私は、どうしても自分のことで一杯になってしまって周りが見れなくなるときがあります。そんなとき、少しでも相手のことを考えてみようと思える自分でいられるか、いられないかが、『思いやり』を生むか生まないかにつながってくるのではないでしょうか。以前、学校の授業で思いやりについて考えたことがありました。「思いやりとは何ですか？」このような質問を投げかけられたときに私の中に真っ先にでてきた答えはありませんでした。それから、自分で調べると『いたわりの心をもって、相手の立場になって考えること。』と記されてました。相手のことを考えて行動するということ自体は思いやりにつながってくると思いますが、思いやりは無意識にでてくるものではないかと考えました。困っている人がいたら考えるよりまず行動、というように私自身もこれから動いてみようと思います。あくまでもこれは私の考えであって、思いやりに本当の答えはないのだろうとも思いました。どんな形でも、今以上に相手を思いやることができる人が、これからの社会にもっと増えてほしいです。私はそう願ってます。

優良賞（2編）



幸せな社会の実現に向けて

文命中学校3年　中津川（なかつがわ）みき

社会にはさまざまな人がいる。人によって得意なことも好きなことも違う。それと同じように、障がいのある人もない人もいる。そんな中で、幸せな社会をつくるために自分ができることは何か。私はある体験を通して、そのことについて深く考えさせられた。

それは、中学二年生の体育の授業のことである。目の不自由な人の気持ちを理解することを目的として、盲人マラソンの体験をした。二人一組になり、一人は目かくしをして走るランナーになり、もう一人はそのランナーの伴走をするというものだった。初めに、ランナーとして走った時、私は「怖い」と恐怖心を一番感じた。伴走者がいても、何かにぶつかったり、足を引っかけたりしてしまわないかと心配な気持ちになった。また、自分ではまっすぐに歩いているつもりでも、ななめに進んでいたり、曲がるときは、うまく体の向きを変えられず普通のスピードで走ることができなかったりもした。実際に、段差とのタイミングが合わず転んでしまうこともあった。

この体験を通して、私は気づいたことが二つある。一つ目は、歩いたり走ったりするという自分にとって当たり前にできることが、障がいのある人にとっては恐怖心が伴うということだ。そして、自分たちよりも危険なことが身近に存在していると思った。二つ目は、そのような状況の中で生活をしていく上で、どうしても障がいのある人たちは人や環境の支えが必要であるということだ。隣でサポートをしてくれる人がいるだけで、どれだけ安心して生活ができるだろう。それが、人ではなく点字ブロックや白杖、音声案内というものでも、いつも感じる恐怖心を少しでもやわらげる重要なサポートになると思う。

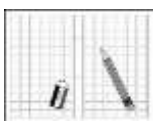
次に、そのような社会に生きるさまざまな人が、みんな安心して生活していける環境をつくるために自分ができることを考えてみた。具体的には二つある。一つ目は困っていたら、ちょっとしたことでも手助けをするということだ。例えば、何か障がい物にぶつかりそうになったら、そっと声をかけるということだ。ただ、よくよく考えてみると、

それ以前に自分ができること、やらなければならないことがあった。それは、道ばたに障がい物となるものを置かないということだ。当たり前にやっていることのようにも感じるが、歩いていて周りを気にしてみていると、道ばたに自転車が置いてあることがあった。意識して周りをみてみれば他にも障がい物となっているものがあるだろう。それはとても危険なことであり、なくさなければいけないことだ。一人ひとりが自分のことだけでなく、たくさんの人と共に生きているということを考えることが必要だ。それはちょっと意識することで変わっていくことだと思う。二つ目は、障がいのある人のことを少しでも知り、理解していくということだ。そう思ったのは友達からある話を聞いてからだった。それは、駅で杖をついた人が点字ブロックの上を歩いていて、少しぶつかっただけなのに怒った人がいたという話だった。私はその話を聞いて悲しい気持ちになった。社会ではまだ障がいのある人への理解が浅いことに気づいた。しかし、ふり返ってみると、私も体育で盲人マラソンの体験をするまでは目の不自由な人のことを理解できていなかったと思う。今でも目の不自由な人の気持ちを全てわかっているわけではないし、わからないこともあるだろう。それでも、少しでも理解するために何らかの体験をしてみるといいと思った。

　これらのことを通して私は、幸せな社会をつくっていくためには、みんな一人の人間として互いにのことを理解して思いやることが大事だと思った。みんなが笑顔でいられる社会をつくるために私ができることを少しでも多くみつけ、それを実現していきたい。

よりそう心を

文命中学校3年　谷口（たにぐち）　直輝（なおき）



　今年六月、ニュースであるテーマパークで聴覚障がいを持つ四人の入館を、障がいを理由に断っていたと報じられていた。これは入館時に付き添いの者がおらず、障がい者だけでは非常時の安全確保に不安があるとして、入館を断っていたのだ。国は障がい者差別解消法が禁じる行為として改善を求め、運営会社は誤った対応をとってしまい、心からお詫び申し上げるとのコメントを発表した。僕はこのニュースを観て、テーマパークという非日常の夢の世界へ訪れる事をどれだけ楽しみにしていたか、障がいがあるというだけで入館を拒否され、どれだけ傷付いたか、想像するだけでとても苦しい気持ちになった。今回のような対応をみると、まだまだ社会全体が障がいのある方への配慮や寄り添う姿勢が足りないなと感じた。自分にしてもそうだ。

　以前、出掛けた時に交差点で信号待ちをしている白杖を持った視覚障がいのある男性と出会った。でもその男性は信号が青になっても歩き始めない。周りの様子を伺うようにしているのではないかと気が付いた。ここの信号機は青になっても、音が流れず、視覚障がいのある方にとっては青になった事がはっきり分かる術がないのだろう。彼を横目で見る人は何人かいたが、みんな声をかけずに通り過ぎていくばかりだった。僕も声をかけるべきか迷っていたら、一人のスーツを着た若い男性が

「大丈夫ですか。もう青ですよ」

と声をかけて一緒に歩き始めた。僕も心の中では助けてあげたいとすごく思っていたのに、行動を起こす勇気がなかった。僕ができたのは、せめて男性が持っている白杖にぶつからないよう、よけて歩く事くらいだった。素通りしている人を見て、なんで助けてあげないのだろうと思ったくせに、結局、僕も同じで一歩踏み出す事ができなかった。自分の勇気のなさにいら立ちを覚え、少し悲しくなった。と同時に、無事、横断歩道を渡り終えた男性を見てとても安心した。

　障がいのある人にとって、今の社会にはまだ様々な障壁、いわゆるバリアによって生活がしづらい場面がたくさんあると思う。それは制度や設備などが不十分な問題から、偏見や差別といった心のバリアによっても、我慢や辛い思いをしている事もあると思う。だからもっと僕達は障がいのある方の声を聞かなければならないと思う。一人ひとりが自分らしく生きる事ができる社会にするためには、お互いにそれぞれの立場を理解しあい、認め、支えあう事が大切である。

障がいのせいでテーマパークに入館できなかった方たちは、その後テーマパークには行けたのだろうか。行っていたとしたら、どんな気持ちだったのだろう。楽しく夢を持てる時間が過ごせたら僕は嬉しい。そして僕自身も、今度は勇気を出して、助けを必要としている人の力になりたいと思う。相手を思いやる気持ちと少しの勇気が、誰もが幸せだと思える未来を作っていくきっかけになると信じている。僕も新たな一歩を踏み出してみようと思う。

佳　作（5編）

今の私に出来ることは

文命中学校3年　佐藤（さとう）　円香（まどか）

私は中学一年生の秋から母方の祖父母と一緒に暮らしています。そんな日常の中で思ったことをこの作文に書こうと思います。

祖父は私が生まれる前、脳梗塞にかかり手足が不自由であります。一緒に暮らす少し前まではよくリハビリを手伝ったり、マッサージをしていました。その頃の私は自分のした事で祖父が喜んでくれることがとても嬉しく、少しでも力になりたいと思っていました。また祖父は毎月、私に本をプレゼントしてくれます。その一冊の本を私はいつも楽しみにしていて大切に読んでいました。

祖母は私が小さい頃よく一緒に遊んでくれたり、買い物に連れて行ってくれました。今でも一緒に出掛けることがあります。祖母と一緒にいる時はいつも笑顔が絶えず、毎日私は祖母に会う週末を楽しみにしていました。

けれど今、二人とは衝突ばかりです。私は祖父のリハビリの手伝いやマッサージも毎日一緒にいると面倒になり、全くやらなくなりました。また、祖母は今、自分の母親の介護も行っています。祖母からにじみ出ている疲れからは、その大変さがうかがえます。けれどそんな祖母に対して私はひどい態度をとってばかりです。まるで今までの事を裏切っているような自分の態度を変えたいと思い、自分なりに考えてみました。

そこで私は二年生の時、介護施設へ職場体験に行きました。そうすることで私も少しは祖父母の気持ちを、理解できるようになるかもしれないと思ったからです。

施設で働いている人はみな、入居されている人たちに対して敬意を持っていました。また、高齢者としてではなく一人の人間として関わっていました。そして施設では亡くなる方も少なくはありません。職員の方たちはそのことを一番よく理解しているからこそ、過ごす時間をとても大切にされていました。だからこそ決して疲れを見せることなくずっと笑顔で接しています。私はその強さにとても驚かされました。また同時に自分の弱さについて気づかされることにもなりました。だからこそもっと祖父母との時間を大切にしなくてはいけないのだと思いました。

私の悪い所は相手が悪いと決めつけると、その人の悪い所しか見えなくなってしまう所です。今までの事を振り返ってみると、私は祖父母の悪い所しか見えていなかったのかもしれないと思いました。

私が祖父母とけんかをする時、やはり最初に思うのは相手の悪い所です。でもやがて一人になって考えてみると自分も悪かったのだという事に気づき、反省します。そしてどうして最初にその事に気づいて素直に謝れないのかと、いつも後悔します。

ただ一緒に暮らすという事で、たとえ家族でもこんなにもすれ違ってしまうのか、本当に難しい事だと思います。でも今回この作文を書いて、今までの自分を反省し、一つ大きな事に気づく事ができました。私の祖父母の良い点です。まず祖父は人一倍家族の事を守ってくれています。私の成長をうれしそうに見守り、応援してくれています。祖母は誰よりも家族の事を心配してくれています。自分はとても疲れているはずなのに、家事も介護も一人で背負おうとしています。考えるとまだまだ見つかります。

私はそんな二人の力になれるようになりたいと、思えるようになりました。でも実際は何をしたら良いのか、はっきりとは分かりません。そんな時自分にヒントをくれるのは今までの経験

だと思います。職場体験で実際に入居されている方々から聞いた思い、職員の方々の姿から学んだこと。私が今まで見てきた祖父母の背中。私は私なりの答えを日々の生活の中で見つけていきたいと思います。

頼れる存在

文命中学校3年　川本（かわもと）　菜摘（なつみ）

私には一人の祖父がいます。多くの人には父方と母方とで四人の祖父母がいるでしょう。ですが、祖父は私にとって何にも代えられない大切な、たった一人の祖父です。

そんな祖父は最近、目が悪いことで悩んでいるようです。祖父は若いころから色盲で、一部の色の区別が苦手です。それと年を重ねたことによる視力の低下が重なってしまっているようです。祖父自身も感じているようですが、周囲の私達も近頃の祖父の変化を感じていました。

フローリングの床の色と十円玉との色が似ていて、落ちている十円玉に気がつきません。十円玉が落ちているところを指差し、伝えても首を傾げるばかりです。

夜、水を飲むために起きようとすると、電気のスイッチやスリッパが見つからないそうです。

また、ゴルフをやっているときにボールがどこにとんでいったのか分かりにくいことや、以前よりも蹲く回数が増えたことなども教えてくれました。祖父と少しの時間会話をすると、祖父の口から様々なことを知ることができました。

これらを受けて、私と私の家族で話し合いを重ねました。そして、祖父が今よりも住みやすくなるよう工夫をすることにしました。

暗い中でもスリッパが見つけやすいよう、スリッパにシールを貼りました。このシールは蛍光シールというものです。日中、光を溜めておいてくれるので、暗くなったときに黄色く光ります。そして、電気のスイッチも、ボタン式のものから紐を引っ張る形式のものに変えました。これを見た祖父はとても喜び、「夜に起きることが億劫じゃなくなるよ。」と言ってくれました。

掃除は月に何度か、祖父と一緒に掃除する日を設けることにしました。祖父と私は離れて暮らしています。なので祖父が何かに困った時、すぐに手伝うことは難しいです。それに加え、祖父とは毎日会わないので、会話も月に数回ほどです。これも改善するべきと考え、週に数回、夜に電話をすることにしました。一回十五分程ですが、お互いに今日の出来事を報告しあうことはとても楽しいです。

目が悪いことで悩んでいた祖父ですが、本当に小さなことを変えることで元の明るくて前向きな祖父に戻ったように思います。笑顔で感謝を伝えられたときは、祖父と同じくらい嬉しかったことを覚えています。

どんな人でも、年齢を重ねていくという事実を曲げることは不可能でしょう。その事実にともなう自身の悩みも多くあることでしょう。私は、祖父と関わったことで頼れる存在の重要性に気がつきました。一人暮らしの高齢者には日常的なことが大変に感じ、実際に体力の面で大変です。掃除をすることや、階段を昇ったり降りたりすること。これらで私たちが頭を抱えることは少ないのではなかろうか。だから私たち家族は祖父の悩みに気づけなかったのだと思います。そんなときに頼れる存在が必要なのです。いつもより少しだけ長く会話をしてみてください。そうすることで本音や悩みが垣間見えるはずです。

私はこれからも祖父を大切にしていきます。今まで以上に、たくさんの話をし、笑いあえる関係でありたいです。

幸福のある社会をつくっていくには

文命中学校3年　戸倉（とくら）　凌馬（りょうま）

二〇一六年一月。僕の親戚のおばさんは倒れた。病院に搬送され、医師から告げられた病名は「クモ膜下出血」だった。おばさんのことで親戚のおじさんも色々あって、僕たちがその事実を知ったのは随分先のことだった。「おばさんは助かり、出血も治った」ということも知らされてとても安

心したが、同時に「後遺症が残ってしまった」ということと、「おばさんの健康状態があまり良くない」ということも知らされ、いつもと同じ不安な気持ちに戻ってしまった。

僕は小学生の頃からよく弟と一緒におばさんの家に遊びに行っていて、そこではたくさん僕たちの面倒を見てもらっていた。また、おばさんは習字の講師をしているので、冬休みの書き初めの宿題を手伝ってもらうためにおばさんの家に行ったり、色んな話をしてもらったりした。色んな思い出があった。しかし、そんな楽しかった思い出もあの冬を最後に途切れた。それ以降は一度もおばさんと会っていない。というよりかは会えない。なぜならおばさんが入院している病院には、保護者同伴ではないと病室に入れないという規則があるからだ。それに、僕は部活や塾があり、両親は共働きで忙しいので会いに行く時間が無いのだ。最近もおばさんのことは、体調の変化のことくらいしか話されないので、不安な気持ちや会いたいという気持ちは日々増すばかりである。

僕は小学三年生の時に学校で福祉体験をしたことがある。内容はいたって簡単で、目隠しをしたまま目隠しをしていない人の手を握って一緒に歩くというものだった。しかし、一見簡単そうなこの内容からは想像できない怖さがあった。なんと、前が全く見えないのである。目隠しをしているから当たり前だとは分かっていたが、目隠しをした瞬間、自分が暗黒世界に足を踏み入れた感覚に陥った。また、存在を知ることの出来ない障害物に恐怖を感じ、故に前へ足を踏み出すことを躊躇した。そして、「早くここから逃げ出したい」という思いでいっぱいになったのをよく覚えている。でもその体験のおかげで身体の不自由な人の気持ちが痛いほどよく分かった。今回改めてこの体験を思い出したら自然と「おばさんはこういうことに限らず、身体の不自由な人たちにしか分からないことを経験しているんだな」という気持ちになった。

今日本は少子高齢化社会にあり、おばさんのような身体の不自由な人や、高齢者はたくさんいる。そしてこれからはさらに高齢化が進み、そのような人たちももっと増えていくだろう。当然、そのような将来を生きるのだから、自分にとっての負担も増えるだろうし、増税がいきすぎると社会保障制度を推し進めていくのにも限界があると思うから、そのような人たちの負担も少しずつ増えていくだろう。だけど、福祉社会のような「幸福な社会」を創っていくためには、一人ひとりが「誰かのために」という考えを持って、お互いに助け合って生きていかないと駄目なんだと思う。それに僕はおばさんのような人たちに何か出来ることをしてあげたいと思っている。だから僕は大人になってもずっと、過去の経験を活かしてそういう人たちを手助けしたり、積極的にボランティア活動に参加したり、募金したり。そういう身近に出来ることで助け合いの気持ちを形にし、つみ上げていって、「よりよい福祉社会創り」に貢献していけるようにしたい。そして、そういったことでおばさんのような人たちが一人でも多く救われるのであれば、これ以上のことはない。

福祉について考えたこと

文命中学校3年　田代（たしろ）　美玲（みれい）

私が先日カフェで勉強をしている時、目の前に一人の男の人が座っていました。しばらくして、その人が立ち上がろうとして座っていたイスを大きな音を立てて引きました。その時、私は正直、「うるさいな。もう少し静かに引いてくれないかな。」と思ってしまいました。そんな時、私が目にしたのは、その男の人が持っていたがっちりとした杖と足に巻いていた長下肢装具というサポートのものでした。パソコンには長下肢装具の写真のようなものが画面に映っていました。その姿を見た時は、ただ単に「自分みたいに自由に体を動かせない方たちを手伝ってあげたい。」と思いました。私も足を捻挫してしまい、松葉杖だったことがありました。でも私が見た男の人は、いつ治るかも分からない不安な状況だと思います。そんな時に支えになるのは近くにいる家族や友だちをはじめとした思いやりがある人の助けではないでしょうか。

私の父は障がいを持っている方のリフトを作ったり、障がい者の方と関わる福祉の仕事をしていま

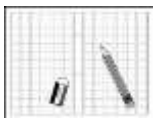
す。私が小さい頃から、よく家族と一緒にみなとみらいで毎年行われている障がい者の方を対象とした展示会へ行き、父の働く姿を見ています。展示会には私がカフェで見かけたような体のどこかが麻痺してしまっている方や生まれつき歩けず大きな車イスに乗っている方などがいました。その方たちに展示会のスタッフや父は優しく話しかけて楽しそうに話をしていました。それを見て私は、「こうやって明るく話しかけてあげるだけでも人は安心するし、障がいを持っている方の気持ちを知れるんじゃないか。」と思いました。なのに私は話しかける勇気も持てずに父からいろいろ話を聞くだけ、つまり自分から福祉について詳しく知ろうとできませんでした。ですが、父からの話で二つのことを学べました。一つ目は、障がいを持った方を支える周りの人は、みな明るいということ。普通は辛くて投げ出したくなりそうな介護でも、明るく接しられるのは、思いやりと周りの人同士が助け合いの心を持っているからじゃないかと思いました。二つ目は、「助けてあげてんだよ。」みたいに上からものを考えないということです。例えばボランティアを行う時に、嫌々参加しても、「やりきったぞー！」とは思えません。福祉活動も同じように本心のままに誰かを助けたり、励ましたりするのが本当の思いやりというものだと思います。

普段、あまり福祉というものを考えたことがありませんでした。福祉というのは、その人の思いやりと助け合いの心から成り立っていたんだと知ることができました。

障がい者の方や高齢者の方と接する機会や気持ちを理解、共有する場は自分の身近にあると思います。私はそのチャンスを無駄にせず、社会の一員なんだということを意識して視野を広げていきたいです。

いろんな思い

文命中学校3年　小野崎紗矢（おのざきさや）



私は去年総合の授業の一環として、職場体験に行きました。数ある職場の中で私は老人ホームを選びました。理由は祖母です。私の祖母は認知症で、いろいろなことを忘れてしまいます。そんな祖母と私はうまく会話をすることができません。なので職場体験を通して何か自分を変えられたら良いと思いました。

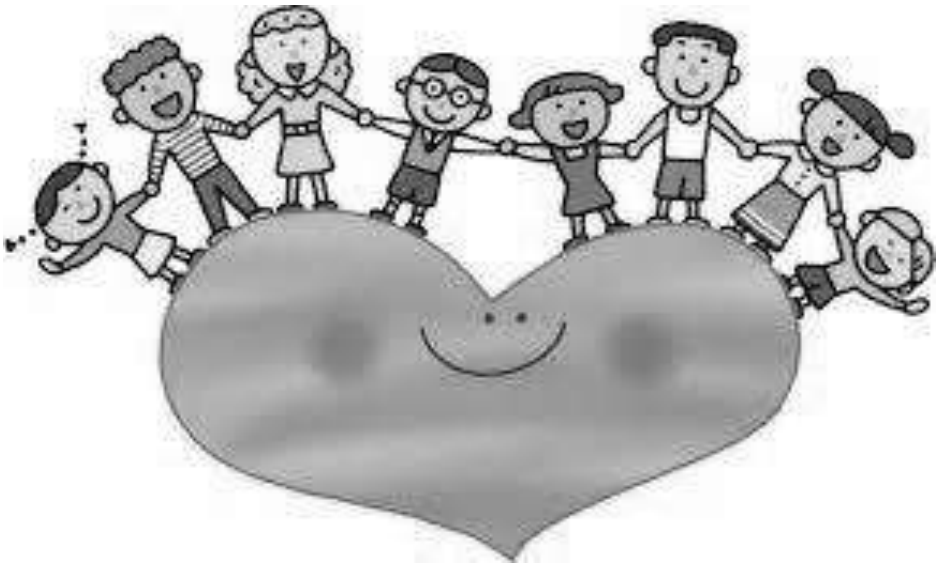
職場体験をしてまず最初に教えられたのは老人ホームに居る人達は本当は家で普通に暮らしたいと思っている、ということです。これに私は少し驚きました。なぜなら老人ホームならずっと見ていてくれる人達がいるし、不便なことなんて無いと思ったからです。でもそれは家族側からの意見でしかないことに気づきました。本人からしてみれば、まだまだ自分は元気だと、手助けなんかいらないと思ってしまうだろうなと思いました。この気持ちが少なからず老人ホームの方々にもあるのだろうなと思います。そんなことを考えているうちに私は祖母のことを思い出しました。

祖母の認知症は少しずつ、少しずつ進んでいました。最近では料理するときに調味料を入れ忘れてしまったりしていて、祖父が料理をすることが多くなっています。昔から料理をすることが好きだった祖母はどんな気持ちなのだろうとその時私は思い出しました。老人ホームに行って家にいたころの生活をしたい人がたくさんいるように、祖母もいままでやってきたことをまだやっていたい、自分の仕事だからやらなくては、とそう思っているような気がしました。でも、祖母と祖父の決めたことに私は何も言うことができませんでした。

職場体験に戻って、自分の担当のフロアの方にホーム内を案内してもらうと、最初に教えられた意味がはっきりと分かりました。老人ホームにはたくさんの施設がありました。寝たきりの方が入るためのお風呂、プライバシーを守るための一人ずつの部屋、置いてあるピアノ。そのすべてが老人ホームで暮らしている人達が家に居た頃のように過ごすためなんだと思いました。私は友達と一緒にそのフロアの方々のお部屋を掃除させてもらいました。そこには、自分の家から持ってきたものや家族の写真などが飾ってあり、自分のスペース。いや、家の一部のようになっていました。そこを見て私は、「あっ、そういうことか」と思いました。それは、老人ホームで以前のような家で

の自由な生活はできないけれど、それに近づけるために、働いている方々が頑張って近づけようとしているということです。きっと、お願いされた訳では無いと思うし、簡単なことでは無いと思うけれどそれでも一人一人の最後まで支えるというのはすごく大変なことだろうなと感じました。

老人ホームでの体験から、私は祖母に対する気持ちが変わりました。それは、何度同じ話をされていてもいいから、たくさん会話をしてもっと祖母について知ることで、やりたいことをできる範囲で一緒にやりたいということです。ですが、祖母と祖父は山形県に住んでいて、とても毎日会える訳では無いので、会った時にはそのことを思い出してたくさん会話ができたらいいなと思います。老人ホームでの職場体験は私にとって考えを新たにするとても良い時間になりました。幸せな社会にするために私にできることは少ないですが、まず身近な人をもっと知ることで相手のことを考えられるのかなと思うので、障がいがあっても無くても関係なく相手のことを知ることから始めたいです。



応募総数　583 編（小学生の部　509 編　・　中学生の部　74 編）

多数のご応募をいただき、ありがとうございました。

第 31 回 開成町福祉作文コンクール実施要項

1．目　　的

“ともに生きる福祉社会づくり”をめざし、次代を担う町内の小・中学校の児童・生徒を対象に福祉作文コンクールを実施し、作文を通して社会連帯を基調とした福祉への理解と関心を深め、福祉活動への主体的参加意識を育成することを目的とする。

2．主　　催

社会福祉法人開成町社会福祉協議会　　神奈川県共同募金会開成町支会

3．後　　援

開成町教育委員会

4．協　　力

開成町立開成小学校　　開成町立開成南小学校　　開成町立文命中学校

5．作文の内容

児童・生徒が、福祉について日常生活を通して感じたこと、考えていること、体験したこと、こうしていきたいと思っていること等を自由に表現した作文とする。

6．募集の方法

町内の小・中学校に「募集案内」配布いただくとともに、「社協だよりかいせい（7/1 発行）」やホームページを活用して、募集の周知を図るものとする。

7．応募の方法

（1）資　　格　開成町内在住の小・中学校の児童・生徒
（2）題　　名　福祉に関する作文で題名は自由とする
（3）用紙・字数　小学生は B4 判の 400 字詰め原稿用紙 800 字以内
　　中学生は A4 判の 400 字詰め原稿用紙 1,600 字以内
　　※コピーは不可とする。
　　※原稿用紙の最初の３行に題名、学校名、学年、組、氏名（ふりがな）を明記する（文字数に含まれます）。
（4）締め切り　平成 30 年９月３日（月）
（5）提 出 先　開成町立小・中学校の在籍者は各学校へ提出する。
　　それ以外の方は開成町社会福祉協議会事務局へ提出（送付可）。

8．審査の方法

（1）別に定める審査要領により構成される審査会にて審査する。
　　審査会：平成 30 年９月 27 日（木）午後3時から
（2）敬老会朗読作文の選出については、要項を別に定める。

9．表　彰

表彰式を開催し、入選者には、それぞれ賞状と記念品を贈る。

（1）表彰の種類

①優秀賞（小・中学生の部各３編　計６編）

〇開成町社会福祉協議会長賞

〇共同募金会開成町支会長賞

〇開成町教育長賞

②優良賞（小・中学生の部各２編　計４編）

③佳作賞（小・中学生の部各５編　計10編）

（2）参加賞

上記３賞に入選した児童・生徒も含め、全応募者に対し参加賞を送る。

（神奈川県福祉作文コンクール主催者より）

（3）表彰式

①期　日：平成30年10月28日（日）　＊開成町福祉大会に於いて

②会　場：開成町福祉会館　１階　多目的ホール

10. 審査結果

（1）入選者に対し、開成町立小・中学校の在籍者には、学校長などを通じて報告する。

（2）開成町立小・中学校の在籍者以外の方には、社会福祉協議会から直接報告する。

11. 発　　表

（1）入選者は、平成30年12月発行「社協だよりかいせい」に掲載する。

（2）入選作文を第31回開成町福祉作文コンクール入選作文に収録し、関係機関へ配布する。

12. そ の 他

（1）入選作文の中から、応募編数に応じて上位入賞作文を第 42 回神奈川県福祉作文コンクールに応募する。

（2）敬老会にて小学生１編、中学生１編朗読いただく。また、敬老会朗読作文を除く最上位入賞者に社会福祉大会にて小学生１編、中学生１編朗読いただく。

（3）応募作品は返却しないこととし、作文の使用に関する権利は主催者に属する。

（4）応募作品により収集した個人情報は、本事業に関すること以外に使用しない。

（5）広報紙等の紙面に作品が紹介される場合があるため、個人情報保護の観点からご本人やご家族・関係者等へ十分配慮する（必要にお応じて事前承諾を得る）。

13. 問い合わせ

社会福祉法人開成町社会福祉協議会
〒258-0021　開成町吉田島1043-1（町福祉会館内）
TEL 82-5222 / FAX 82-5928

第 31 回　開成町福祉作文コンクール　審査員名簿

※順不同　敬称略

所属機関	審査員名
開成町立開成小学校	細　川　澄　子
開成町立開成南小学校	碓　井　梨　恵
開成町立文命中学校	松　村　　徹
開成町教育委員会	井　上　義　文
開成町民生委員児童委員協議会	鳥　海　成　則
ボランティアグループ　四つ葉	落　合　ふたば
ゆめクラブ開成	影　山　　尚
開成町身体障がい者福祉協会	遠　藤　伸　一
開成町心身障害児者と家族の会かるがも	須賀田　由　理
母子寡婦福祉会　つくしの会	木　村　淑　子
開成町　福祉課	渡　辺　雅　彦
開成町社会福祉協議会	高　橋　政　幸

9 月 27 日（木）の審査会にて、代表作文を審査いただきました。

■発行日／　平成 30 年 10 月
■発　行／　社会福祉法人開成町社会福祉協議会
神奈川県足柄上郡開成町吉田島 1043－1（開成町福祉会館内）
TEL 0465－82－5222　　FAX 0465－82－5928
URL　　：http://www.kaiseishakyo.jp
Email　　：network@kaiseishakyo.jp

みんないっしょ！ともに生きる福祉社会づくり！